
想像

鳩梨

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
想像

【Nコード】
N1865B

【作者名】
鳩梨

【あらすじ】
これは、つまらない お話 です。 いいですか？ お話 です。

（前書き）

一切の責任は負いません。ジャンルは推理に一応分類していますが、推理と言えるかどうかは【君】が決めるのです。これはあくまでお話 なのだから。

——おや？

ああ、すまない。

余りにも退屈だったものだから、ついつい寝てしまった。

どうしたのかね？ 道にでも迷ったかい？

それとも、まさかとは思うが……、くだらないお伽噺でも聞きに
来たのかな？

ほう、これはこれは。

とんだもの好きが居たものだね。

ああ、すまない。別に馬鹿にした訳じゃあないのだよ。

さあて、お喋りはこのくらいで、そろそろ始めようか？

——ああ、そうだ。警告を忘れていた。

現実主義者、夢想家、遊び心の無い者。

君たちには不快感を与えるかもしれないね。

嫌なら、立ち去りたまえよ。別に引きとめはしないさ。

——君たちの観測する【僕】にとっては、そのほうが楽では
あるのだしね。

はあ。——それでは始めるかね。

「……かね」

「はい。ムツシュ・カージュ」

ここは古びたビルの屋上。そこに、このお話の主人公、「カージュ・オ・ルヴォワール」は助手の「ミシエル・ジェネス・コール」と共に訪れていた。

「ふむ。その割には、誰も居ないね？」

「はい。ムツシュ・カージュ。この事件は自殺と言うことで解決しましたから」

「……おや？ では何故、私はここに居るのだ？」

「はい。ムツシュ・カージュ。それはこの事件が自殺ではないからです」

ミシエルはそう言つて無表情に頷いた。

その言葉を聞きカージュは溜め息をつきながらも屋上の検分を始めた。そのために来たのだから面倒でもやるしかない。

「ミシエル。時間がもつたいない。事件の概要を話したまえ」

屋上の隅を一見ぶらぶら歩いているだけのカージュにミシエルは口を開き、事件の概要を話し始めた。簡潔に。

「事件が起きたのは一昨日の夜のことです」

屋上の外縁には格子状の安全柵。さび付いてはいるが強度は十分だ。ただ、見た目は最悪だが。

「警邏中の二人の警官がこの下を通りがかった時、丁度上から人が落ちてきたそうです」

ビルの東西にはこのビルより少し小さい程度のアパートと、解体間近のビル。飛び移ろうと思えば出来ないでもないが、成功する確率よりも失敗する確率の方が大きそうだ。あるいは、この安全柵がなければ五分五分くらいなのだが。

「落下人は女性。このビルに務めていたそうです」

ビルの高さは五階。屋上を含めれば六階程度か。運が悪ければ十分に生存できる高さだ。

「警官の一人が慌てて屋上に上がったそうですが、そこには誰も居なかったそうです」

「ミシエル。屋上の鍵は常にかいているのかな？」

「いいえ。ムツシュ・カージユ。屋上の鍵は常に閉めてあります。鍵の管理はこのビルの管理人。初老の男性。少なくともムツシュ・カージユよりは紳士だと思います」

「……それは、給料二か月分をいまだに払っていない私への嫌味かい？」

「いいえ。ムツシュ・カージユ。正確には二ヶ月と半分です。そして、嫌味ではなく、事実です」

「……なるべく早く払えるよう努力はするよ」

「精々ががんばってください。その台詞はコレで通算24回目です」

「……………」

カージユは泣きそうな顔になると口を閉じ、安全柵をまたいで外側の検分を始めた。

「ムツシュ・カージユ。自殺しても保険金は出ません」

「しないよ」

保険金が出ないことなんて承知していた。保険金を納めていないのだから。

屋上から下を見下ろすとそこには石畳の敷かれた路地。様々な人々が、様々な理由で忙しく、あるいは気だるそうに歩いている。その少し向こうには道路。最近ようやく出回り始めた車が大気を汚しながら、馬車に混じって走っている。心なしか、馬が迷惑そうにしている風に見えるのは、きっと気のせいではないだろう。

そんなことを思っていると、ふと何かが見えた気がした。カージユは柵を掴んで覗き込むようにしてそれを見た。

「ミシエル。なあミシエル」

「はい。ムツシュ・カージユ。なんですか？」

「これはなんだい？」

そう言ってカージユが指を差した先にはプラスチック製の筒。それは屋上に突き刺さり下の路地まで一直線に延び、やはり路地に突き刺さっていた。

「はい。ムツシュ・カージュ。これは屋上に溜まった雨水などを排出するためのパイプです」

「こういったものはどこにでもついているものなのか？」

「はい。ムツシュ・カージュ。引き籠もっていないでたまには自主的に外に出てください」

「面倒じゃないか」

「ムツシュ・カージュ。あなたは間違っています」

「何を今さら」

そう鼻で笑うと立ち上がり、検分を再開する。

殺風景な屋上。さて、別に自殺でも不思議ではないのだが、なぜ

ミシエルは自殺ではないと断言しているのか。

そんなに、気に食わないのだろうか？

「よし。ミシエル。警察に行こうか。異を申し立てよう」

「はい。ムツシュ・カージュ」

さあ、コレでお話は終わりだ。

どうだい？ 言っただろう？ つまらない、と。

あとは【君】らで勝手に空想したまえよ。

【僕】は、もう寝るから。
起こしてくれるなよ？

なんだい。

わかったよ。じゃあ、よく聞いてくれ。

名前には必ず意味がある。

それさえわかってしまえば、あとは二通りの想像しか出来ない。
そして、お話をよく思い出せば、想像は一つだけになる。

あとはもう、本当に知らない。

こんどこそ、【僕】は寝るよ。

おやすみ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1865b/>

想像

2010年10月8日15時42分発行